東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

ジェンダーとスポーツ：社会科における「包括的性教育」の教材として

メタデータ	言語:
	出版者: 東京学芸大学教育実践研究推進本部
	公開日: 2024-02-07
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 苫米地, 伸
	メールアドレス:
	所属: 東京学芸大学
URL	http://hdl.handle.net/2309/0002000201

東京学芸大学紀要　人文社会科学系　**75**: 197－211，2024

ジェンダーとスポーツ
―― 社会科における「包括的性教育」の教材として ――

苫米地　　伸*

社会学分野

（2023年8月30日受理）

要　旨

本稿では，ユネスコによる「包括的性教育［Comprehensive Sexuality Education］」の立場から，社会科における「包括的性教育」の教材として，スポーツとジェンダーの関係性について考察する。まず，「スポーツ」という言葉の定義から始め，近代において出現したスポーツが男性を中心として展開されてきたことを確認する（1節）。次に，男性の身体を念頭に置いて展開されてきたスポーツに女性，あるいはセクシュアル・マイノリティが参加することによって明らかになってきた問題点を，「筋肉ギャップ」（2節），および「徹底的な男性化」（3節）と名付けて提示する。男性の，男性による，男性のためのスポーツに，女性が参入することは，「最高の男性が最高の女性に勝利し続ける」という壁をいかにして乗り越えるか，という問題を提起する。そして，それを乗り越える方策としての薬物使用による筋力増強が正当化されてしまうことにつながる。これらの問題を別の形で乗り越える対策として「代わりとなる（あるいはあつらえの）スポーツ」，あるいは「あたらしい身体文化」，さらに「ルールの変更」について考察する（4節）。近代におけるスポーツの第三の転換点とされる「性差の消滅」をいかにして実現するかを考えること，あるいはスポーツをジェンダーの観点から見直すという作業は，社会科における「包括的性教育」の教材として十分に成立するだろう。

キーワード：包括的性教育，スポーツ，ジェンダー，「筋肉ギャップ」，「徹底的な男性化」，「代わりとなる（あるいはあつらえの）スポーツ」，「ルールの変更」，「性差の消滅」

1．はじめに

本稿では，ユネスコが編集した『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』の記述に基づいて，いわゆる「包括的性教育［Comprehensive Sexuality Education］」の立場から「性教育」を考えていく（UNESCO［2018=2020：28-39］）。ともすれば，日本における「性教育」という言葉は，「生殖，リスク，疾病」（UNESCO［2018=2020：33］）に関する事柄についての教育というように，狭く捉えられがちである[1)]。しかし，ここでの「包括的性教育」とはそうではない。「包括的であること」については，次のように説明されている。

> ・・・包括的セクシュアリティ教育は，健康とウェルビーイング（幸福）のための分析的なものの見方やコミュニケーション，その他のライフスキルを向上させることにより，学習者のエンパワーメントをサポートする。それは例えば，セクシュアリティ，人権，健康的で尊敬し合う家族生活や対人関係，個人的かつ共有的な価値観，文化的・社会的規範，ジェンダー平等，反差別，性的行動，暴力とジェンダーを基

＊　東京学芸大学 社会科学講座 社会学分野（184-8501　東京都小金井市貫井北町4-1-1）

にした暴力（GBV），同意とからだの保全，児童・早期・強制婚（CEFM）や女性性器切除／切断（FGM/C）のような性的虐待や有害な慣習などに関連するものである。（UNESCO［2018＝2020：29］）

この記述によれば「文化的・社会的規範，ジェンダー平等，反差別」といった文化的な事象も含まれることになる。つまり，より広範な社会的文脈における「ジェンダー」についての事柄も，「包括的性教育」という概念に従うなら性教育の一部であると言えるだろう。

このことを踏まえて以下では，社会科教育における性教育について，一つの試みとしてジェンダーとスポーツとの関係を示してみたい。例えば2021年に東京で開催された東京オリンピックにおいて，「史上初めてのトランスジェンダー選手」（朝日新聞［2021.08.23：27］）としてローレル・ハバード選手が重量挙げの競技に出場した。彼女はいわゆるMtFのトランスジェンダーであり，この出来事はアスリートの性別をどのように考えるのかについて，物議を醸した。本稿はこの出来事も含めて，スポーツという現象を元にしてジェンダーを考察するための手がかりを，あるいは予備的な情報を提示することを目標とする。まずは「スポーツ」という概念をめぐる議論を確認する。その上で，ジェンダーとスポーツとの関係，「筋肉ギャップ」「徹底的な男性化」についての議論，さらにスポーツと二分法的な性別との関係について考察する。

2．スポーツ［Sports］とは

ジェンダーとスポーツの関係性を考えるにあたって，まずは，スポーツとは何かについて考察する。つまりスポーツを定義するということである。多木も触れているように（多木［1995］）[2]，ジレは『スポーツの歴史』において次のように定義している。

一つの運動をスポーツとして認めるために，われわれは三つの要素，即ち，遊戯，闘争，およびはげしい肉体活動を要求する。（Gillet［1949=1952：17］）

この定義は私たちにとってもなじみ深いものであるだろう。確かに，陸上競技のような個人種目，サッカーのような団体競技など，私たちが日常的に触れることのできるもの，特にオリンピックの競技種目のほとんどが，この定義によってスポーツであると理解できる。それは「古代ローマの剣闘士の死闘にも，中世の騎士たちのトーナメントにも」当てはまる「可能な限り一般化された身体競技の定義」（多木［1995：14］）なのである。

しかしながら，はたして私たちが慣れ親しんでいる「スポーツ」と「古代ローマの剣闘士の死闘」や「中世の騎士たちのトーナメント」を一緒にしてもいいのだろうか。確かにフェンシングの原型と見なせなくもないとはいえ，占領地において獲得された奴隷同士の，あるいは名誉を賭けた騎士同士の，単なる殺し合いでしかない身体的運動と，私たちの知っているスポーツを一緒にしてもいいのだろうか[3]。

このように私たちが親しんでいるスポーツ，いわゆる近代スポーツと，古典的なスポーツ（それはスポーツというよりも身体運動とでも記述した方がよいようなもの）を区分して考えた方がよい。例えばトマは次のように述べている。

・・・この用語［スポーツ］が，実はきわめて多様かつ異質なものであり，そのため一切の定義を無効にしてしまいかねないほど多岐にわたる実践行為を指していることが分かる。（Thomas［1991=1993：9］；［ ］内引用者補足）

トマはスポーツの定義の困難さについて，いくつかの論点を挙げている。例えば，起源論。スポーツについて論じる場合，古代の儀礼などと現代のスポーツを結び付けるかどうかで議論が分かれる。有名な『遊びと人間』（Caillois［1958=1970］）を著したカイヨワは，遊びの要素としてアゴーン（競争）を取り上げる際に「古代ギリシャ」を想定していたという。その一方で，「近代スポーツは工業化システムやその論理と結びついている」（Thomas［1991=1993：15］）とする論者もいる。

また用語の語源についてはどうだろうか。トマによれば「スポーツ（sports）という語は，『はしゃぎ回る』を意味する動詞デスポルテ（desporte）に由来する，古フランス語の名詞デスポール（desport）から派生している」（Thomas［1991=1993：19］）とされている。これが14世紀にイギリスに渡り，disportからsportとなる。さらにフランスに19世紀に再び移入された際，その語に含まれていたのは「競馬やボート遊び，乗馬猟，魚釣り，弓射，体操，フェンシング」（Thomas［1991=1993：20］）等であったという。ここに列挙されたものは，私たちの感覚とはかなり異なるものであるだろう。

ここで提示したのはトマの議論の一部ではあるが，スポーツの定義の困難さの一端が理解できるのではないだろうか。しかしここで考えたいのは，このような一般的定義では見えないもの，つまり私たちが直面し，体験している近代スポーツのことである。トマもすでに触れていることではあるが，多木はエリアスの議論（Elias and Dunning［1986=1995］）を踏まえた上で，古代の儀礼的な身体運動と，近代スポーツには断絶があるとする。

> ・・・近代スポーツのひとつの特徴は，身体の闘争であるにもかかわらず，そこから暴力的な要素を除き，身体の振る舞いにたいしてある規則［ルール］を課したことにある。（多木［1995：16］；［ ］内引用者補足）

多木に従えば「暴力の克服」（多木［1995：14］），あるいは非暴力の追求がルールの制定を促す，ということになる。例えばボクシング。見た目にはただの殴り合いのように見えるかもしれないが，ルールがあるからこそ「殴り合い」ではなくスポーツになるのである。つまり，スポーツにとってルールの存在こそが重要なのである[4)]。

エリアスによればスポーツは「近代のアングロ・サクソンの発明」，つまりイギリス発祥である。その証拠に，今私たちがスポーツと呼んでいる現象（サッカー，野球，テニスなど）は，どんな言語でもSportsのカテゴリーに入る。ではなぜイギリスにおいて「ルールに基づくゲーム」（多木［1995：18］）としてのスポーツが生まれたのか。それは17～18世紀にかけて，暴力に頼らない対立の解消，議会制度が発達したことによる。エリアスによれば「イギリスの地主階級の『議会主義化』はかれらの娯楽のスポーツ化のなかにその相対物をもっていた」（Elias and Dunning［1986=1995：48］）。この地主階級こそが，「ジェントルマン［gentleman］」であり，彼らがスポーツを生み出すのである。

> スポーツの原型となるものの多くがイギリス起源であることにはそれなりの理由がある。その大きな理由は，ジェントルマンが政治から余暇にいたる広い社会領域を非暴力的なゲームにする歴史的な段階にさしかかっていたことであり，こうした社会的な環境のなかで，はじめて〈書かれた規則〉にもとづいたゲームとしてのスポーツが作り出せたからであった。（多木［1995：27］）

要するに，近代スポーツの起源には，イギリスの社会的な環境が大きく影響を及ぼしている。さらに，それを生み出すのに寄与した人々は，地主階級であり「ジェントルマン」，gentlemanという一定の権力を握る男性たちであった[5)]。

こうした近代スポーツの起源にこそ，現在のスポーツからの女性排除はあるのではないかと筆者は考える。例えばスポーツを「進歩への欲求に立脚し，危険を冒してまで先に進もうとする，集中的な筋肉の努力に対する自発的で日常的な信仰」（Thoma［1991=1993：22］；Coubertin［1922］）と定義していた，「オリンピックの父」クーベルタンは次のように発言している。

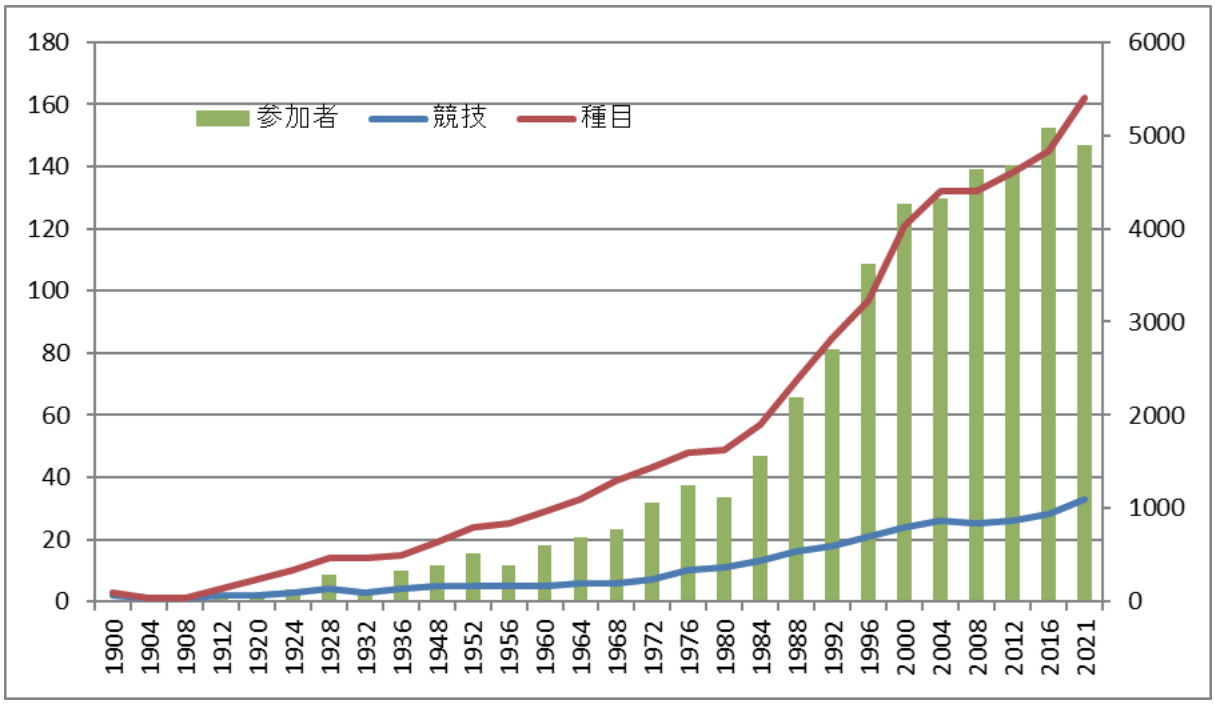
> 真のオリンピックの英雄とは，私の眼には，成年男子の個人である。私は，個人的には，女性の公的競技への参加は認められない。これは女性が多くのスポーツの実践を控えねばならないという意味ではない。スペクタクルに身をさらすべきでないという意味である。オリンピック競技においての彼女たちの役割は，かつてのトーナメントの場合同様に，勝利者に冠を授けることであるべきだ。（多木［1995：65］；多木訳によるクーベルタンの言葉[6)]）

この文言は，1935年の『近代オリンピックの哲学的基礎』と題されたラジオ放送での発言である。すでに1900年パリ大会から女性選手の参加は認められていたのだが，1928年アムステルダム大会では女性参加者の割合が1割を初めて超えていた。こうした状況から「白人男性のエリート主義を死守しよう」（多木［1995：65］）とするあまり，クーベルタンはこのように発言したのではないか，と考えられる。つまりクーベルタンは，いかに平和主義を唱えていたとしても「実際には極めて保守的で，人種と性を差別する白人男性そのもの」（多木［1995：63］）であった[7]。

オリンピックへの参加が限定されていたとはいえ，実際には女性たちは盛んにスポーツを行っていた。例えば，バスケットボール。1891年にアメリカでネイスミスによって考案されたスポーツであるが，冬期に（つまり屋内[8]で）行うものであり，身体接触がない安全なスポーツとして女性のあいだでも人気があった（多木［1995：90-92］）。

先述のように，1900年パリ大会から，初めて女性が近代オリンピックに参加を果たしたが，その後の経過はどのようなものだったのか。それをグラフにしたのが次の図である[9]。

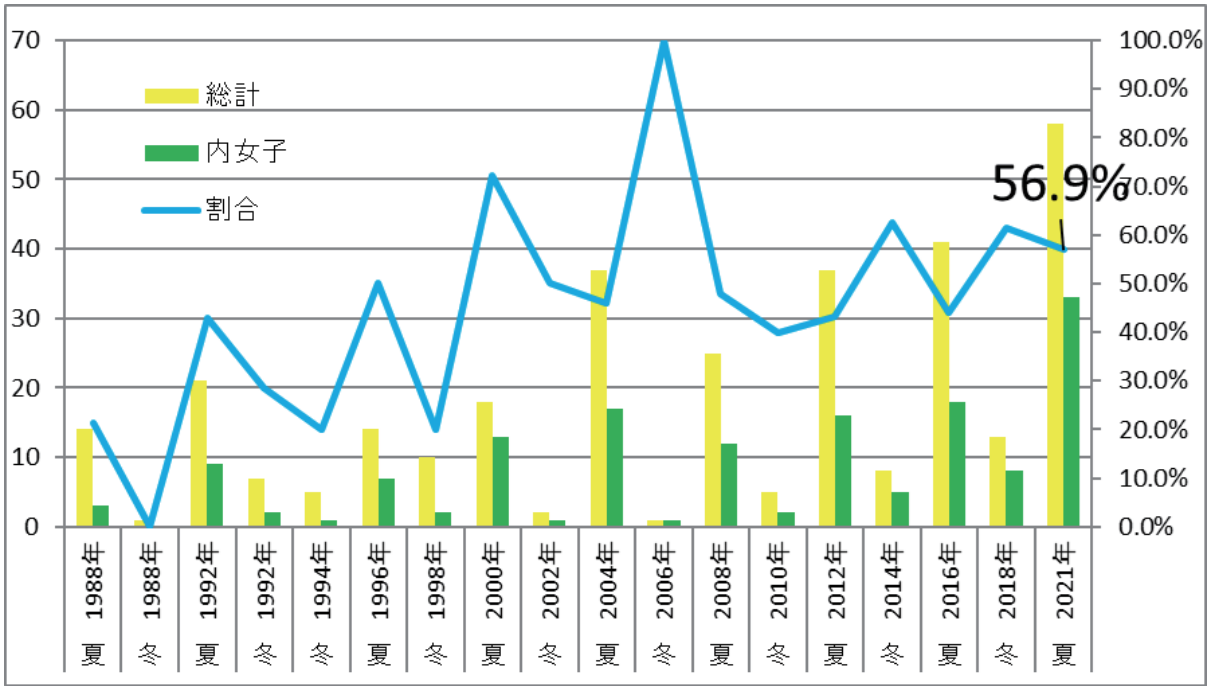
参加者数，参加競技数，参加種目数のいずれも，來田も記しているように1980年代以降急激に増えている（井谷・田原・來田編［2001：38］）。とりわけ参加者数はリオデジャネイロ大会で5000人を超えた。また女性の参加競技数に関して言えば，2000年代になってようやく男女同数に近くなり，2021年東京大会では33競技，参加種目数については162種目となった。



出典：2000年シドニー大会までは『目でみる女性スポーツ白書』（井谷・田原・來田編［2001：32-40］）。2004年アテネ大会以後は各大会Webサイトを参照。

図1　夏季オリンピック大会への女性の参加

では次に『オリンピック憲章』（71．入賞者名簿1．IOCは，いかなるものでも，国別の世界ランキング表を作成してはならない。）に反しているかもしれないが，日本のソウル大会（1988年）以後の金銀銅メダル総獲得数に占める女性アスリートのメダル数の割合を見てみよう。



出典：筆者作成

図２　ソウル大会以後のメダル数

徐々に女性選手がメダルを獲得し，割合としても男性選手の獲得数よりも多い大会が増えており，その活躍がよくわかるグラフである。

このグラフから，女性選手の活躍は1986年の男女雇用機会均等法が成立したおかげなのではないか，と指摘したくなるのだが，残念ながら日本女性の社会的地位はそれほど高まっているとは言えない[10]。世界経済フォーラムによるグローバルジェンダーギャップ指数は，2023年で146カ国中125位である。日本よりも下位にある国々は，そのほとんどがアジアとアフリカ諸国となっている（とりわけ経済参加尺度と政治的エンパワーメント尺度の低さが目立つ）。

表１　FIFA Women's World Cup予選各大陸別参加国数

	アフリカ	アジア	欧州	北中米	オセアニア	南米	
1991大会	4	9	18	8	3	3	45
1995大会	6	4	29	5	3	5	52
1999大会	12	11	33	10	6	10	82
2003大会	15	14	34	19	5	10	97
2007大会	26	17	40	21	4	10	118
2011大会	24	17	41	26	8	10	126
2015大会	26	20	46	28	4	10	134
2019大会	23	22	47	22	8	10	132
2018ＷＣ	52	43	53	35	11	10	204

出典：筆者作成

オリンピックと並ぶ世界的なスポーツイベントであるサッカーのFIFA Women's World Cupを見てみよう。上記の表はその予選参加国数を表にしたものである。一見してわかるのは，アジア諸国とアフリカ諸国の参加国数の少なさである。男性のFIFA World Cup予選参加国数は2018年ロシア大会で204カ国であるが，FIFA Women's World Cupの2019年フランス大会は132カ国であった。女性日本代表[11]が2011年ドイツ大会優勝，2015年カナダ大会準優勝という好成績を残したとはいえ，男性のFIFA World Cup予選と比較したならば，「強豪国」[12]つまり安定して強さを発揮する代表は少なくなる。つまり，スポーツは男性のものなのである。

３．どうしても残る課題１：「筋肉ギャップ［Muscle Gap］」

先ほど示したように，オリンピックに女性が次第に参加するようになり，ほぼ同数の参加が可能になってきた。サッカーのワールドカップも，女性選手によるワールドカップが開催されるようになり，オリンピックの競技種目も男女で同数の競技が増えてきた。このように女性のスポーツへの参加が進んできたとしても，スポーツをめぐるジェンダーの問題は残る。ここではガットマンの議論にしたがってそのことを考察してみよう（Guttmann［1991］）。

ガットマンは「身体能力［physical prowess］は，どのスポーツにも存在するものであり，男女間の比較はおそらく避けがたい」とし，まずはその生理学的な差異について確認している（Guttmann［1991：251］）。ガットマンによれば，「平均的に，男性は女性よりも，身長があり，体重が重く，そして力強い」。とりわけ筋力量において，身体サイズを揃えるなら，女性は男性の80％程度である。このことによって走力だけではなく，投擲種目にも差が出る。短距離走においては，骨盤の幅も影響していると言われる。この生理学的な事実は，ホルモンの分泌量によると説明される。つまり男性は「女性よりも20倍から30倍のテストステロンを持っているという事実」が，筋力量に影響を及ぼしているというのだ。

ただし，長距離走や遠泳などでは女性が優ると述べている。例えばナタリー・カリモア［Natalie Cullimore］は，1971年に100マイル走で，男性が誰も完走できなかったのにもかかわらず，16時間17分のタイムで勝利したし，スーザン・ブッチャー［Susan Butcher］は，アラスカで行われた1168マイル犬ぞりレースで３年連続勝利した。これもまた生理学的な事実として「女性は男性よりも脂肪を新陳代謝し，新陳代謝するための脂肪を相対的に多く持っている」ため，持久力に優るとされる（Guttmann［1991：251-252］）。

現実問題として記録差は縮まってきている。例えばマラソン競技のタイムを見てみよう。男性が54年間かけて12分縮めたのに対し，女性は37年間で15分縮めている。また同時期の世界記録を比べてみると，男性の1981年の世界記録が２時間８分18秒で，2018年に２時間１分39秒であるのに対し，女性の1982年の世界記録が２時間26分12秒で，2019年には２時間14分04秒であり，その男女差は1980年代前半において17分54秒だったのが，最近では13分25秒まで縮まっているのである。ガットマン曰く，「今日の女性たちは過去の有名な男性アスリートよりも速い（『偉大なスイマー，バイスミュラーは女性決勝にも残らない』）」のである（Guttmann［1991：252］）。

しかしながらそれでも「最高の男性が最高の女性に勝利し続けるという事実は，そのまま」（Guttmann［1991：252］）であるとガットマンは述べている。つまり，クリッテンデンの言葉を借りれば「筋肉ギャップ」（Crittenden［1979（1974）］）をどのように考えればよいのかが，スポーツとジェンダーとの関係性を考える上で重要な問題である。

ホールとリチャードソンは「スポーツ競技における統合は，性別がパフォーマンスと無関連なところであればどこでも起きるべきであるだろう」と述べている（Hall and Richardson［1982：13］）。この主張を字義通りに読むならば，かなり強力なものである。なぜならば，かなりの数のスポーツにおいて，性別に関わりなく参加するべきだと述べているからである[13]。すなわち「男性と女性のスポーツでの分離を，規則ではなく例外とする」というわけだ（Guttmann［1991：254］）。

ただしここでも議論の余地は残る。「パフォーマンスと無関連」であること，スポーツが身体的差異と「真の意味で関連する」かどうかを判断するのは（Guttmann［1991：254］），どのレベルで，どのような形で行われるのだろうか。ガットマンはアメリカンフットボールや重量挙げなどを「例外」と見なしているようだ。しかしそのガットマンでも「例外的な女性たちが直接的に男性に挑戦するべきではないという理由は存在しない」としている（Guttmann［1991：254］）。

いずれにせよ，先ほどのホールとリチャードソンの主張をそのまま実現したならば，2021年の東京オリンピックで問題になった，トランスジェンダーの選手をどのように扱うのかということも確かに解決する[14]。男性女性にかかわらず，もちろんトランスジェンダーであったとしても，同一の競技に参加すれば問題は解決するからである[15]。まだまだ「例外」的ではあるが，例えば女性ゴルフ選手のアニカ・ソレンスタムは2003年に男性のゴルフツアーに参加した（朝日新聞［2003.05.22：17］）。あるいは記憶に新しいところでは，女性サッカーの元日本代表である永里優季は，神奈川県２部の男性チームに加入した（朝日新聞［2020.09.17：16］）。

「挑戦」と表現されるような，このような行動が当然のように行われるなら「筋肉ギャップ」の問題も解決されていくのではないか。

4．どうしても残る課題２：「徹底的な男性化」

前節で述べた生理学的な事実と競技の性別による分離は，もう一つの問題を引き起こす。それが徹底的な男性化である。もしスポーツの全てが筋力の問題であるなら，行き着くところは薬物の摂取，ドーピングへの帰着を意味するということだ。

純粋に極限的に筋力によるスピードとパワーのみを追いかけるのなら，ひたすら「身体改造」をしていかなければならず，それは畢竟ドーピングにつながるのではないか。ガットマンはこのことを「公正性」の問題，すなわち「秘密裏に行われているステロイド使用の蔓延は，フェアプレーという理想・・・を破壊するという脅威を与える」と述べている（Guttmann［1991：255-256］）。少々長くなるがガットマンの言葉を引用する。

> ステロイドはアスリートに，最も自然な中型の人物が最も激しい練習プログラムを行って獲得することが可能なもの以上に，大きな筋肉サイズと強さを得ることを許す。ステロイド使用が禁止されたのだから，それは秘密に行われる；そしてそれが秘密だから，パフォーマンスが誠実に達成されたのかどうか誰も知らない（Guttmann［1991：256］）。

このことは男性においてもそうであった。例えば，1988年のオリンピックにおいて100m走で優勝しながらも，メダルを剥奪されたベン・ジョンソンもその一人である。

しかしながら，女性アスリートの場合，このことはさらに深刻な問題であった。ソビエト社会主義共和国連邦崩壊以前の社会主義国の選手たち（ステートアマ）にとって，ドーピングは当たり前の行為だった。ここでもガットマンの例示を紹介しておこう。

> 1977年，TSC Berlinの短距離選手レナーテ・ノイフェルト［Renate Neufeld］は，彼女のコーチによって与えられた錠剤を服用していた。彼女の足に多くの筋肉がつき，痛みを感じ始めたことに気づくまで。彼女の声は低くなり，口ひげが生え始めた。彼女がその錠剤の服用を継続するのを拒絶したとき，彼女はオリンピックチームから外され，あからさまな報復に脅かされた：「お前はじきに工場の床磨きをすることになるだろう」。彼女は西ドイツに逃げ込み，そこで彼女が服用していた錠剤が，アナボリックステロイドであったと確認された（Guttmann［1991：257］）。

ガットマンが例示しているものよりも現在有名な事例は，ハイジ・クリーガーのものであるだろう。東ドイツ出身のクリーガーは，16歳の頃から本人に知らされないまま男性ホルモンの筋肉増強剤を服用し続け，そのため競技生活を終えた後，結局性転換手術を受けなければならないほど「男性化」した（朝日新聞［2009.11.03：21］）。

このような競技のための薬物使用あるいはドーピングを行った者たちは，自らを犠牲者として正当化を行うとガットマンは述べる。すなわち，「勝利の強調と熱狂した記録への探求は，競技上の名声と富という欲望された目的のためには，どんな手段も正当化されるというシステム」を，社会が作り出していることが問題だとする（Guttmann［1991：257］）。この見解に従うならば，ベン・ジョンソンにせよ，レナーテ・ノイフェルトにせよ，ハイジ・クリーガーも，犠牲者であったということになる。

ガットマンによれば，この薬物使用あるいはドーピングをめぐる問題を解決するには，「探索技術が改善されなければならない」（Guttmann［1991：258］）。それはアスリートだけの問題ではなく，スポーツ競技に携わる全ての者たちに課された課題である。コーチ，大会関係者，競技団体の役員，さらには選手個人や競技団体へのスポンサーなど，関係者全てが対象となる。例えば，ロシアは2016年以来オリンピックの大会への参加を禁じられている。世界反ドーピング機関（WADA）により，国家としてドーピングに関係していたとされてしまったからだ[16)]。

だがしかし先述のように，禁止されたから隠蔽されるようになり，隠蔽されたなら発見するのはさらに難しくなるという，俗に言う「いたちごっこ」の状況となる。またその一方で「誤った」判定が問題になることも増えている。例えば，風邪薬に含まれる「メチルエフェドリン」は興奮薬としてドーピング検査で捕捉される（朝日新聞［2019.03.30：16］などを参照のこと）。そして強調しておかなければならないのは，おそらくそういった疑念が抱かれやすいのは，ガットマンも列挙しているように女性アスリートたちである。例えば，フローレンス・グリフィス・ジョイナー選手のように。さらに今後は，トランスジェンダーのアスリートたちに疑いの目は向けられるであろう。

だからこそ，探索技術の改善が必要なのだが，そこにはかなりの疑心暗鬼も発生するだろう。ガットマンの言葉を借りれば，「全てのアスリート－男性も女性も－は，不信の雰囲気の漂う中，疑惑の雲の下で，訓練し競争し続ける」のである（Guttmann［1991：258］）。

５．スポーツにおける「性差の消滅」はあり得るか

ガットマンの議論にしたがって，スポーツとジェンダーの関係をめぐる二つの論点，「筋肉ギャップ」と「徹底した男性化」を提示した。この二つの論点に関して，さらに考察を加えたい。まずはこれらの論点への，ガットマンの見解を示しておこう。

「筋肉ギャップ」について。ガットマンは，生理学的な差異をめぐるフェミニストの議論を紹介する中で「代わりとなる（あるいはあつらえの）スポーツ［alternative sports］」について論じている。彼が引用しているイングリッシュによる「身体的な類型の多様性がその中で優ることが期待できるような，スポーツの多様性を発展させるべきだろう」（English［1978：275］）という議論は，明らかに「代わりとなるスポーツ」を推奨している。

この「あつらえのスポーツ」は，確かに二つの問題点を持っている。第一にそれは，保守主義者を喜ばせるものになる可能性がある。つまり先述したような女性特有の生理学的な事実から，「女性らしさ」を強調するようなスポーツが提唱される可能性である。「若々しく，優美で，しなやかで，繊細な女性たちが，優雅に水の中に浮かんでいたり，音楽に合わせてリボンを振り回すイメージは，全く男性の権力に挑んだりはしない」（Williams［1986：224］）からである。第二に，現在人気を博しているスポーツ，例えば日本の状況に合わせれば，サッカー，野球，バスケットボールといったようなスポーツと同等の「威信や人気を獲得できる」わけではないことが反論としてあげられている（Guttmann［1991：253］）。

次に「徹底した男性化」について。薬物使用やドーピングに関係してしまった者たちを，「犠牲者」として語ることは，個人の責任や過失を社会に返すことによる自己正当化であるとガットマンは述べる。つまり先述した「勝利の強調と熱狂した記録への探求」という社会が創り出したシステムの議論に対して，ガットマンは反論している。ガットマンによれば，この社会で生活している私たち全員が，スポーツについて「勝利の強調と熱狂した記録への探求」のみに価値を置いているわけではないからだ。なるほど例えば，私たちがスポーツに求めている価値は，勝利や記録だけではなく，「誠実さや公正さ」という価値もあるではないかというのである（Guttmann［1991：258］）。

しかしながら，ガットマンによるこれらの反論には，一つの前提があるように思われる。それは男性優位の（あるいは支配的な）スポーツが，これまでと同様，ずっとそのままで変化しないという前提である。ここで言う男性優位のスポーツとは，男性の身体を基礎として創り上げられたスポーツであり，男性の身体能力を基準にしたルールによって成立するスポーツである。つまり筋力によって優劣が決まるものとなる。筋力を鍛えることにより，速さや力強さが強調され，より多くの筋力があれば，勝利することができ，記録もよくなっていく。さらに，スポーツの産業化を通じて，勝利を通じて，あるいは記録が向上すれば，富と名声を得ることができる。

この考え方が前提であれば，「あつらえのスポーツ」が男性優位のスポーツよりも人気を得ることは難しく，たとえ誠実さや公正さが強調されたとしても，結局は「勝利の強調と熱狂した記録への探求」に価値が置かれる。とどのつまり，いつまで経っても何らかの形で，女性はスポーツから排除され続けるということだ。このことを踏まえて，多木は次のように述べている。

> ・・・生理学的と思われていることの多くが，歴史的にあまりにも長く社会的立場と女性らしき身ごなしの文化を固定されてきた結果でないと言い切れるのだろうか。（多木［1995：159］）

多木は，スポーツについての認識の転換点が三つあると論じている。一度目はイギリスでの近代スポーツの発生であり，先述したようにそれは「暴力の克服」，あるいは非暴力の追求によるルールの制定が特徴である。二度目は，スポーツのアメリカナイゼーション，つまりアメリカにおけるメディア化と産業化である（多木［1995：80-106］）。このアメリカナイゼーションの結果，勝敗と記録が過剰に強調されるようになる。

そして第三の転換点こそが，「性差の消滅」であると思われる（多木［1995：160］）。

> しかし女性スポーツについて語るとすると，何よりも重要なことは，スポーツの概念が男性の身体を核にして構成されてきた政治的無意識を暴き，これまでスポーツが語られ，実施されてきた長いひとつの身体文化に終焉をもたらしたのが女性スポーツの出現であるという認識ではなかろうか。（多木［1995：160］）

多木は「あたらしい身体文化」の予感を，一例としてモダンダンスの中に見いだしている。モダンダンスは，もちろん筋力が必要であるかもしれないが，それ以上に身体を「美的ないし知的な作品が社会に登場するための媒体」とするものである（多木［1995：162］）。確かに，モダンダンスの演技を私たちが見るとき，美的感覚であったり，芸術性によって楽しむのではないだろうか。少なくとも，その演技者の性別を気にしたり，筋力があるかどうかでは評価しないはずだ。

> 身体文化が変化するのは，性の差異の様相が変化しはじめるときである。あたらしい身体文化が生まれるとすれば，この差異が差別ではなく，別の組み合わせ，エロティシズムの可能性などにひらかれたしなやかで豊かな関係になったときでしかない（多木［1995：165］）

このような身体文化は，スポーツを認識するときの文脈には，未だなってはいない。しかし，ガットマンが前提としていたように従来の男性優位のスポーツ観のみが継続し続けること，あたらしい身体文化が到来しないとは言い切れないのではないかと多木は論じるのである。

「あたらしい身体文化」の登場という社会全体の認識が大きく変更されるような出来事を待つまでもなく，そのきっかけとして筆者は「ルールの変更」という手段があるだろうと考えている。なぜならば，ルールの制定こそが近代スポーツの原点だからである。例えば，フィギュアスケートにおいて，ジャンプを禁止する，一定の速度以上にスケーティングしないことをルールに加えたならば，見方は変わるはずだ。実際にはアイスダンスがそのような競技となっているように見える[17]が，それを主な競技とすることが考えられる。

またそれは多分に先述した「代わりとなるスポーツ」も含めたものであるだろう。例えば，すでに2021年のオリンピック東京大会において，柔道では「混合団体」という種目が増えた。同様に団体競技であるならば，男女混合チームで競うというゲームを考えてみてもいいだろう。11人中5人は女性が入っていなければならないサッカーの試合は，より戦略的，あるいはより戦術的なゲームの興味深さを表現することになるはずだ。個人競技においては，走ることや泳ぐことであれば，「速さ」ではなく「遠さ」を評価の基準とするスポーツも考えられるだろう。単に筋力というだけではなく，持久力を求める競技があってもよいのではないか。

6．まとめにかえて

本稿ではジェンダーとスポーツとの関係性について論じてきた。まず私たちが現在日常的に接しているスポーツは近代スポーツであり，その起源はイギリスにある。イギリスのジェントルマンによって「暴力の克服」として出現したスポーツは，その出自からして男性的なものであった。そのため，女性が差別的に扱われてきたのである。

時が経つにつれて，スポーツを受容する社会も変化し，女性の参加はかなりの程度認められるようになってきた。それでも残る問題を本稿では「筋肉ギャップ」と「徹底的な男性化」と名付けて論じてきた。この二つの問題は，同じ前提の上に成立する。それは，男性優位のスポーツがこれまでと同様，これからも変化しないはずだという前提である。なぜならば，言わば「筋力至上主義」，あるいは勝敗と記録への過剰な強調こそが，生理学的な筋力差を問題にし，薬物を使用してまで富と名声を求めるアスリートたちの，そしてその活躍を観客として楽しむ私たちの欲望の源になっているからである。

もしこのようなスポーツを認識する上での前提が崩れるならば，それは多木の言う「第三の転換点」としての性差の消滅が訪れる時であるだろう。それがどのような形で訪れるのかはわからないが，少なくとも筋力至上主義とは異なる認識が必要であり，例えば美的感覚であったり，芸術性といったものによってスポーツを認識するということがあげられるのではないか。

しかしながら，現実には逆のことが起きているように思われる。例えば，フィギュアスケートを考えてみよう。2006年冬季オリンピックのトリノ大会において，日本唯一の金メダルを取ったのは荒川静香選手であった。彼女の演技は，ジャンプを重視せずにいわゆる「イナバウアー」によって評価を受けたものだった。しかしながら，男性女性問わず，フィギュアスケートという競技において現在（もちろん以前もだが）重視されるのは，ジャンプの回転数である。ジャンプの回転数を上げるには，当然のことながら筋力が必要となる。つまり「筋力ギャップ」の問題も，記録という点では「徹底した男性化」あるいは薬物使用の問題も，依然として残ってしまうのである。

スポーツが徹頭徹尾，私たちが生活する社会のなかで成立するものであるならば，ジェンダーとスポーツとの関係性もまた，社会とは切り離して語ることはできない。すなわち「われわれが『社会』と呼んでいるものはこうした出来事に意味を与える言説の作用にほかならない」（多木［1995：23］）。これは単にアスリートに限られる問題ではなく，観客として楽しむ私たちにとっての問題でもある。

だから私たちは常に次のことを考えていなければならない。はたして，性差を超えて，もしくはジェンダーを超えてスポーツを語る言説の到来はあり得るか。

謝辞

本論文の一部は，「中等社会系教科目における性教育の可能性」（令和３年度「学習指導要領，幼稚園教育要領及び教科書に関する研究プロジェクト」，プロジェクト担当者：日高智彦先生）の助成によるものである。

注

1）ここでの狭い意味での「性教育」においても問題はある。とりわけ現在問題視されているのは，いわゆる「はどめ規定」の存在である。「はどめ規定」とは，小学校および中学校の『学習指導要領』において，「受精」あるいは「妊娠の経過」を「取り扱わないものとする」とされていることを指す。原文をそのまま引用すれば，理科［第５学年］「3　内容の取扱い」における「(4) 内容の「B生命・地球」の（2）のアの（イ）については，人の受精に至る過程は取り扱わないものとする。」（文部科学省［2017a：87］；下線部引用者強調）であり，保健分野「3　内容の取扱い」における「(7) 内容の（2）のアのイについては，妊娠や出産が可能となるような成熟が始まるという観点から，受精・妊娠を取り扱うものとし，妊娠の経過は取り扱わないものとする。また，身体の機能の成熟とともに，性衝動が生じたり，異性への関心が高まったりすることなどから，異性の尊重，情報への適切な対処や行動の選択が必要となることについて取り扱うものとする。」（文部科学省［2017b：129］；下線部引用者強調）のことである。ちなみに，通称『解説』での記述を以下に示しておく。『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説　理科編』では，「なお，ここでは，人の卵と精子が受精に至る過程については取り扱わないものとする。」（文部科学省［2017c：71］）とあっさりしたものであった。しかしながら，『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説　保健体育編』では，「3　内容の取扱い」において「(3) から（10）については，『2内容』で解説した。」（文部科学省［2017d：227］）となっているものの，「2内容」には直接的な記述は見当たらない。筆者の穿った見方であるかもしれないが関連する記述としては，「(1) 健康な生活と疾病の予防」の「ア　知識」における「(オ) 感染症の予防」，「イ　エイズ及び性感染症の予防」の中に「エイズ及び性感染症の増加傾向と青少年の感染が社会問題になってい

ることから，それらの疾病概念や感染経路について理解できるようにする。また，感染のリスクを軽減する効果的な予防方法を身に付ける必要があることを理解できるようにする。例えば，エイズの病原体はヒト免疫不全ウイルス（HIV）であり，その主な感染経路は性的接触であることから，感染を予防するには性的接触をしないこと，コンドームを使うことなどが有効であることにも触れるようにする。」（文部科学省［2017d：213］；下線部引用者強調）というように，性感染症予防対策の一環として「性的接触」，つまり性行為をしないことを推奨しているように読める。

2）ちなみに本稿は全面的に多木の議論に拠っている（多木［1995］）。新書なので読みやすく，ここでは触れることができなかったスポーツの産業化の話など，興味深い議論が展開されている。

3）またジレの三要素のうち，私たちは「はげしい肉体活動」を強調する傾向があるように思われる。例えば昨今のe-sportsをめぐる議論がその典型であるだろう。反射神経や指の動きはあったとしても，走ったりすることはないe-sportsは，はたしてジレの言う「スポーツ」と言えるのだろうか。あるいは馬術。馬を上手に操ることは，「はげしい肉体運動」なのか。ただし，欧米などでのsportsという概念は「遊戯」や「闘争」を重視しているように思われる（まさにカイヨワの言う「アゴーン＝アレア結合」）。例えば，2006年ドーハアジア大会ではチェスが，2010年広州大会では囲碁と中国将棋が競技種目であった。「遊戯」や「闘争」がスポーツの要素として重視されているからこそ，競技種目に選ばれたと言える。また日本語としての「スポーツ」は「体育」と相補的に扱う傾向がある。例えば日本スポーツ協会は「国民体育大会」を「日本最大の国民スポーツの祭典」と表現している。大塚によれば，「体育」とは1876年に近藤鎮三がPhysical Educationの訳語として文部省の教育雑誌の中で使用したのが始まりであるという（大塚［2011：138］）。ただし戦前は教科名としては「体育」という言葉は使われず，「遊戯」「体操」「教練」「体練」が使われていた。ここでの「教練」「体練」の考え方が，現在の精神論や体罰に影響を与えているとしている。ちなみにNHKの大河ドラマ『いだてん』では，近代オリンピックに参加し始めたころ，やはり「体育」が強調されていたこと，そしてそれがイコールであったことが描かれていた。

4）またルールを統一することができれば，スポーツのグローバル化（輸出）が可能になる。有名な事例としては，嘉納治五郎による柔道の輸出があるだろう。日本古来の武術の一つであった柔術を，柔道という「武道」にしたということは，井上の著作を参照のこと（井上［2004］）。言ってみれば，柔道という「武道」は嘉納治五郎によってルールを取り決められた近代スポーツである。例えば，剣道という「武道」が未だにグローバル化できないのは，そのルールの中に「残心」という，言語化するのが難しい評価項目があるからであると思われる。

5）例えば，ここでミルの『女性の解放』（Mill［1869=1957］）を思い浮かべてもいいだろう。ミルが描いているのは19世紀のイギリスであるが，その時代であっても男性優位の社会が，どれほど女性に対して苛烈であったのかがわかる。

6）筆者自身は確認できていないが，この文言は次のものである。

Coubertin, Pierre de 1935 “Les Assises philosophiques de l’olympisme moderne”, message radio, diffuse de Berlin.

7）2021年の森喜朗オリンピック組織委員会委員長（当時）の「わきまえろ」発言を思い起こさせる文章である。この「わきまえろ」発言については，拙稿を参照していただければと考える（苫米地［2023］）。

8）多木は，このバスケットボールが屋内で行われる競技として誕生したように，スポーツの屋内化が，一つのエンターテインメントとしてのスポーツ，つまりスポーツの産業化と結びついていると指摘している。（多木［1995：92］）

9）ここで示した，女性が参加可能になった競技数と種目数は，もちろん井谷らの文献を参考にしたのだが，数え上げるに際して問題点もあった。例えば，混合種目の存在をどう扱うのか。テニスや卓球の混合ダブルスはどのようにカウントするのかということである。來田が作成した表では混合種目を別にして数えていた。また，混合競技だけではなく，馬術は元々性別による区別がなかった競技である。他方で，新体操は女性のみが参加可能である。ここでは，現時点で女性が参加可能なものを数え上げるというやり方で数を算出したが，多少のブレが生じている可能性がある。その点に関しては，読者自身の検討課題にしていただきたい。もう一点指摘しておきたい。2021東京オリンピックの統計資料を探したが，精確な数値を示したサイトが本稿執筆時では見つけられなかった。現在のほとんどの国際的なスポーツイベントは，スタッツ［Stats］，つまり統計的な情報を充実させることが多くなってきた。例えばFIFAサッカーワールドカップやUEFAヨーロッパ選手権などでは，出場選手リストはもちろん，試合の時間経過，選手個人の走行距離やパスの回数に至るまでリアルタイムで公開される。インターネットの普及により，速報の形で情報を流通させるのだが，2021年の東京オリンピックは，メダルの獲得数や日本人選手の記事ばかりが目立っていた。

10）以下では，近代オリンピックとサッカーのFIFAワールドカップを題材として，スポーツへの女性参加を論じている。しかしながら，この二大スポーツイベントについては，別の論点もあるだろう。まず，オリンピックに関しては，2021年の東京オリンピックにおける贈収賄事件（竹田恆和JOC元会長によるIOC委員の買収疑惑，および高橋治之JOC理事（当時）

とその出身広告代理店などによる業務独占）の問題が2023年の本稿執筆時点で明らかになりつつある。他方FIFAワールドカップに関しては，2022年にワールドカップカタール大会が開催されたが，開催国カタールにおけるセクシュアル・マイノリティ差別への反対の意思を表明したドイツ代表の記念写真が物議を醸し，Netflixにおいて公開された『FIFAを暴く［FIFA Uncovered］』が明らかにしたFIFA内部の利権争いなども深刻な問題であるだろう。いわゆる「メディア・イベント」（Dayan and Katz［1992=1996］）としてのこれらの大会が，スポーツの産業化，あるいは商品化に寄与してしまっていることもまた重要な論点である。また，こと日本社会においてはいわゆるスポーツ・ウォッシング，つまりテレビなどのメディアがこの大会を報じることによって，他の事件や出来事を「隠蔽」するかのような働きを示してしまう事態が顕著になっている。上記二つのスポーツイベントではないが，2023年３月に開催された野球のWBC，その際に活躍した大谷選手，吉田選手の話題が連日報道番組で取り上げられ続けている事態は，まさにスポーツ・ウォッシングであるだろう。このようにスポーツと社会の関係を考える論点はジェンダー以外にもあり得る。

11）通常「FIFA Women’s World Cup」は日本語で「女子ワールドカップ」と表記される。「ワールドカップ」と言えば男性選手の大会であるのは，サッカーだけに限らず他のスポーツでも同様である。この言葉遣いに筆者は違和感があるので，ここでは「女性選手による」とした。ついでながらサッカー女性代表チームのニックネームは「なでしこ」とされている。「日本女性の清楚な美しさをたたえていう語」とされる「大和撫子」由来である。美を競うスポーツの代表選手の愛称ならまだわかるが，筆者にはなぜ「なでしこ」なのか理解できないでいる。

12）ここでの本論からは外れるが，女性スポーツと政治の関連について一言述べておく。YouTubeチャンネル「小澤一郎Periodista」（［2023.07.13］）によれば，いわゆる「マチズモ」と呼ばれる男性優位主義が顕著であったスペインにおいて，昨今女性サッカーの人気が高まってきており，それは競技力の向上にもつながってきているという。スペインでは2004年に社会労働党政権が誕生して以降，2007年には「実践的男女平等法」が制定され，2008年には平等省が設置された（内閣府男女共同参画局［2011：91-105］）。また2005年には同性婚も認められている（鳥澤［2010］）。さらに2023年３月８日の国際女性デーを目指して，内閣の閣僚級ポスト，企業の取締役会における比率を男女どちらも４割以上とするクオータ制の導入を盛り込んだジェンダー平等促進法案が閣議決定された。このような社会的側面あるいは政治的領域での男女平等への積極性が，スポーツにおいても女性の活躍に影響を与えているのではないかと思われる。ちなみに，スペインの2023年ジェンダーギャップ指数順位は18位である。

13）ホールとリチャードソンは，実際にはイングリッシュにならって，次のように述べている。「私たちはここで，＜あらゆる＞年齢集団の＜あらゆる＞スポーツがいつかは統合されるべきだろうと議論しているのではない。・・・私たちの立場は次のようなものである。すなわち，全員が男性のチームあるいはリーグを通じて，女性を除外する特定のスポーツに女性が参加する機会を持たないところで，彼女たちは，もし必要とされる技能を持っているのであれば，男性アスリートとともにプレイすることを許されるべきだろうというものである」（Hall and Richardson［1982：14］；＜＞内，原文イタリック）。なので，ここでの主張は，筆者が単純化した強調である。

14）今回の事件で興味深いのは，性別をどのように判断しているのかという問題である。來田によれば，現在のIOCの見解は，性器の存在ではなく，テストステロンの濃度で「性別」を判別している（來田［2015：167］；IOC［2011］）。來田の訳文を記しておく。「法的に女性である人は血清中のテストステロン濃度によって示されるアンドロゲンレベルが男性の範囲以下であるか，男性の範囲内であっても競技に有利とはならないアンドロゲン耐性がある場合には，女性の競技に出場する資格を有する」。このことは，薬物投与により性別を変更することが可能であるため，後段で述べる「男性化」の問題とも関連するものである。

15）ホールとリチャードソンは，次のように述べていた（Hall and Richardson［1982：14］）。「結局のところ，不平等な達成が，全ての女性たちの間での自尊心を緩和する方向へと導き，そして女性アスリートはそのフィールドでの成功報酬に確実にほとんどアクセスしてこなかったということが，論じられてきた。いくつかのスポーツで分離された競技上の競争を維持することは，女性アスリートに，自己の権利によってヒロインとして認識されるようになることを可能にするだろうし，成功の報酬や利益の平等な分け前，もしそのスポーツが統合されていたならば，おそらく起こらなかっただろう何かを受け取ることを可能にするだろう」。この文章は男性と女性という性別をめぐるスポーツへの参加が主題だが，現在では，ここで取り上げた東京オリンピックでの事件のように，女性とトランスジェンダーの間での参加の問題になってきている。北丸は，トランプ政権誕生によって発生した，コネチカット州での訴訟を紹介している（北丸［2021：158-165］）。数人の女性高校生ランナーがMtF選手の参加を禁止するよう訴えたものである。そして，それは全米に広がり，トランスジェンダー選手の参加を禁止する法律の制定へと向かっている。すでにアイダホ州では禁止法が成立した（ただし最高裁による

発効の一時差し止めを受けている）。この現象を考える一つのヒントとして，北丸が提示している「NCAAによるトランスジェンダー学生アスリートたちの包有」という指針が参考になるだろう（参考URLを参照のこと）。また北丸の記述で重要なのは，このような反トランスジェンダー訴訟の大半が，保守系シンクタンク「ヘリテージ財団」やキリスト教右派組織「自由防衛同盟［Alliance Defending Freedom］」による政治キャンペーンであるという点にある。北丸は，「つまり問題は，彼らにとっては『女性の権利を守るという大義名分』ではなく，『トランスジェンダーの脅威』という妄想を煽り，『リベラルの台頭を阻止する』というのが第一の，かつ唯一の，狙いだということ」であると説明している（北丸［2021：163］）。このことから分かるのは，当然のことながら，スポーツもまた，決して社会から切り離されたものではなく，その全てが社会的なものだということである。

16）ただしROC（ロシアオリンピック委員会）として選手自身は個人資格で参加している。

17）ここで「見える」としたのは実際には男性選手によるリフトアップが評価のポイントとして，しばしば取り上げられるからである。小柄な女性選手を，身長があり，その筋力によって，より高く長い時間持ち上げることが，より高い評価点を得られるというものであるなら，それはここでの「筋力ギャップ」と変わらない。

参考文献

朝日新聞 2003.05.22「『一生に一度，楽しむ』　ソレンスタム，男子ゴルフツアーいざ挑戦」朝刊：17。

朝日新聞 2009.11.03「（消えぬ薬の傷：１）砲丸女王は男になった　16歳から知らずに筋肉増強剤」朝刊：21。

朝日新聞 2019.03.30「競泳・藤森，ドーピング陽性　リオ五輪４位，意図的な摂取は否定」朝刊：16。

朝日新聞 2020.09.17「試合に出るため，競争から　元なでしこ・永里優季，男子チームへ」朝刊：16。

朝日新聞 2021.08.23「（2030　SDGsで変える）多様な性，五輪が示す現在地」朝刊：27。

Caillois, Roger 1958 *Les Jeux et Les Hommes*, Gallimard. =1970 清水・霧生訳『遊びと人間』岩波書店。

Crittenden, Ann 1979(1974)“Closing the Muscle Gap”, Twin, Stepanie L. ed., *Out of the Bleachers: Writings on Women and Sport*, The Feminist Press: 5-11.

Dayan, D. and Katz, E. 1992 Media Events: The Live Broadcasting of History, Harvard University Press. =1996 浅見訳『メディア・イベント：歴史をつくるメディア・セレモニー』青弓社。

Elias, Norbert and Dunning, Eric 1986 *Quest for Excitement*, Blackwell. =1995 大平訳『スポーツと文明化』法政大学出版局。

English, Jane 1978“Sex Equality in Sports”, *Philosophy and Public Affairs* 7-3: 269-277.

Gillet, Bernard 1949 Histoire *Du Sport, Que Sais-Je?* 337. =1952 近藤等訳『スポーツの歴史』白水社。

Guttmann, Allen 1991 *Women's Sports: A History*, Columbia Univ. Press.

Hall, M. Ann, and Richardson, Dorothy A. 1982 *Fair ball: Towards Equality in Canadian Sport*, The Canadian Advisory Council on the Status of Women.

飯田貴子・井谷恵子編 2004『スポーツジェンダー学への招待』明石書店。

井上俊 2004『武道の誕生』吉川弘文館。

IOC Press releases 2011‘IOC Addresses Eligibility of Female Athletes with Hyperandrogenism’, 05 April 2011.

井谷・田原・來田編 2001『目でみる女性スポーツ白書』大修館書店。

北丸雄二 2021『愛と差別と友情とLGBTQ+』人々舎。

來田享子 2015「スポーツは性を分けて競技する必要があるか：分科会3-B　セクシュアル・マイノリティのスポーツ環境　登壇者抄録」日本スポーツとジェンダー学会『スポーツとジェンダー研究』13：165-168.

Mill, John Stuart 1869 *The Subjection of Women*, Longmans, Green, Reader, and Dyer. =1957 大内・大内訳『女性の解放』岩波文庫。

文部科学省 2017a『小学校学習指導要領』

文部科学省 2017b『中学校学習指導要領』

文部科学省 2017c『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説　理科編』

文部科学省 2017d『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説　保健体育編』

大塚正美 2011「体育の歴史と役割」『城西国際大学紀要』19-1：137-145.

多木浩二 1995『スポーツを考える』ちくま新書。

Thomas, Raymond 1991 *Histoire du sport*, P. U. F. =1993 倉持訳『スポーツの歴史［新版］』白水社。

苫米地伸 2023「マイクロアグレッションとジェンダー」『東京学芸大学紀要人文社会科学系』74：166-182.

鳥澤孝之 2010「諸外国の同性パートナーシップ制度」国立国会図書館調査及び立法考査局『レファレンス』60-4：29-46。

UNESCO ed. 2018 *International Technical Guidance on Sexuality Education: An evidence-informed approach (Revised Edition)*. =2020 浅井他訳『国際セクシュアリティ教育ガイダンス【改訂版】：科学的根拠に基づいたアプローチ』明石書店。

Williams, Claire Louise, Lawrence, Geoffrey, and Rowe, David 1986 "Patriarchy, media and sports", Lawrence, Geoffrey, and Rowe, David eds. *Power Play: Essays in the Sociology of Australian*, Hale and Iremonger: 215-229.

参考URL

・「はどめ規定」について（2023/07/23 取得）
https://www.nhk.or.jp/shutoken/wr/20210826a.html

・來田論文（[2015]）：（2023/07/23 取得）
https://www.jstage.jst.go.jp/article/sptgender/13/0/13_165/_article/-char/ja/

・日本スポーツ協会：（2023/07/23 取得）
https://www.japan-sports.or.jp/kokutai/tabid62.html

・内閣府男女共同参画局「諸外国における専門職への女性の参画に関する調査」：（2023/07/23 取得）
https://www.gender.go.jp/research/kenkyu/sekkyoku/pdf/senmonsyoku/15_ch4-1-1.pdf

・小澤一郎 Periodista 2023.07.13「スペインの女子サッカー，急成長の理由。女子W杯開幕を前にサッカーからジェンダー平等を考える｜23年7月 ラ・リーガ対談 番外編 木村浩嗣 × 小澤一郎」：（2023/07/23 取得）
https://youtu.be/UcyZENs5SJA

・IOC「性別の適格性」：（2023/07/23 取得）
https://olympics.com/ioc/news/ioc-addresses-eligibility-of-female-athletes-with-hyperandrogenism

・「NCAA によるトランスジェンダー学生アスリートたちの包有」：（2023/07/23 取得）
https://ncaaorg.s3.amazonaws.com/inclusion/lgbtq/INC_TransgenderHandbook.pdf

Bulletin of Tokyo Gakugei University, Humanities and Social Sciences, **75**: 197 - 211, 2024

Gender and Sports:

As a Teaching Materials for "Comprehensive Sexuality Education" in Social Studies

TOMABECHI Shin*

Sociology

(Received for Publication; August 30, 2023)

Abstract

This paper discusses the relationship between sports and gender as a teaching materials for "comprehensive sexuality education" in social studies from the standpoint of "Comprehensive Sexuality Education" by UNESCO. First, starting from the definition of the word "sports," we will confirm that sports that emerged in the modern era have been developed mainly with men in mind (Section 1). Next, I present the "muscle gap" (section 2) and "thorough masculinization" (section 3) as problems that have become apparent when women or sexual minorities participate in sports that have been developed with the male body in mind. The entry of women into a sport of men, by men, and for men raises the question of how to overcome the barrier that "the best men keep winning over the best women". Then, muscle strengthening through drug use is justified as a strategy to overcome the muscle gap. As another way to overcome these problems, we will discuss "alternative sports," "a new physical culture," and "rule changes" (section 4). The consideration of how to realize the "disappearance of gender differences," which is regarded as the third turning point of sports in the modern era, or the reflection of sports from the perspective of gender, would be sufficient as teaching materials for "comprehensive sex education" in social studies.

Keywords: Comprehensive Sexuality Education, Sports, Gender, muscle gap, thorough masculinization, alternative sports, rule changes, disappearance of gender differences in sports

* Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)